横浜市立 若葉台特別支援学校　　学校評価報告書　　（ 令和 元 ～ 3 年度 ）

令和 元 年度

重点取組分野	具体的取組	自己評価結果	総括
生きてはたらく知	A：①個別の教育支援計画及び個別の指導計画の内容や作成の手順等の見直しを行い、作業の明確化や効率化図る。また指導と評価の一体化を推進し、個々の目標達成を目指して、評価に基づいた授業改善を図る。②一人ひとりを大切にした教育課程の編成（授業内容の精選・組織と授業時数の配当等） B:①地域に展開する校内実習を行うことで、自己有用感やコミュニケーション力を身に付ける。②現場実習を行い、自己選択・自己決定する力を身に付ける。③この2つを結びつけ、ふり返る力を育て、キャリアデザイン相談会を行う。④将来の自立に役立つ一般教科指導の充実を図る。⑤教育課程を見直すことで、よりよい授業実践を図り、自立と社会参加を目指し生きる力を身につけられるようにする。	A：①個々の目標達成に向けた取り組みについては、保護者からも高い評価を得られた。このことから指導目標を設定する際に、児童生徒の実態把握に基づいた指導と評価が概ね達成できたと考える。②新教育課程編成に向けて検討を重ねた。日課表や時数の変更などの編成を行った。今後も授業改善に努め、よりよい教育課程の編成に向けて検討していきたい。 B：①地域がもう一つの教室として若葉台地域で校内実習を展開することにより、世代の異なる方や場に応じたコミュニケーション力の向上や「働くことへの意欲につながってきている。②現場実習を行い様々な職種を体験し、自分の向いている職種を選ぶことが概ねできた。③キャリアデザイン相談会を実施し、生徒自身がふり返る力や相談力を身につけ、自分の将来像について考えることができた。④⑤自立に向けて必要な学習内容を共有し横断的な教育課程の編成を検討することができた。今後も授業改善に努め、よりよい教育課程の編成に向けて検討していきたい。	B
育ちあう力	『豊かな心の育成プラン』に基づき、「交流及び共同学習」の充実を図る。 ○A・B両部門間の「校内でのふれあい交流活動」を通して、仲間意識を育み、共に生きる力を育てる。また、「学校間交流」「地域との交流」「副学籍による交流」などを通して、他者を大切にし“育ちあう力”を育む取組を推進する。	「校内でのふれあい交流活動」や様々な行事・授業をきっかけにAB部門の日常的な交流の場面も増えている。また授業を通して地域の方に来ていただいたり、伺ったりする活動もあった。しかし「学校間交流」や「副学籍校交流」、「プレイルーム交流」など内容や実施方法を引き続き検討する必要がある事項もある。	B
健やかな体	A：保護者や医師の協力のもと、個々の児童生徒の健康状態を適切に把握し、日々の健康の維持と増進を目指して取組を行う。 B：自他の体を大切にし、自らの健康を見つめ、進んで生活の改善を行うとともに、生涯の健康づくりのための取り組みを行う。	健康、安全、衛生面の学習環境の整備は、日々の清掃活動等ほぼ適切に整備されている。しかし、保護者より以前に比べて同学部以外の教員からの声かけなどが減少しているという指摘があった。全教員がより多くの子ども達へ関心を向けて挨拶などに取り組んでもらえると、心の豊かさにつながり、学校全体としての連携が深められると思われる。個々の児童生徒のよりよい成長に繋がるように、校内での情報共有を密にし、すべての教育活動の充実をめざしたい。	B
センター的機能の取組	①旭区の小学校・中学校などへの教育相談や巡回支援、研修の提供など特別支援教育の専門性を活かした取組の促進と充実を図る。②若葉台地区周辺の教育機関や福祉機関、地域の方々と連携・協働し、障害理解や啓発、研修の提供などを通して当事者の方々の社会参加に貢献する。	① 旭区を含む5つの区において、40件程度の教育相談や巡回支援、10件程度の研修を提供した。小中学校に限らず、ニーズがある機関にできる限りセンター的機能を発揮していきたい。② 進路事任や保護者とも協力しながら、外部機関と連携し、本校児童生徒の社会参加に貢献した。引き続き、取り組んでいきたい。	B
地域連携・学校運営協議会	①これまで培われてきた、B部門と地域とのつながりを活かし、A部門も共に学び地域と交流する機会を模索する。②様々な媒体や機会を活用し、学校教育活動と地域住民活動の相互理解を進める。③学校運営協議会での意見交流をより効果的に生かせるよう、地域連携に関してわかりやすく要点を絞った学校評価を行う。	①「地域はもう一つの教室」という柱のもと、B部門生徒の地域での活動が充実している。地域とB部門との深い関係性を活かし、丁寧な打ち合わせを経て、A部門高等部生徒の実習を地域で有意義に行うことができた。小中学部を含め、A部門のより多くの児童生徒が社会資源の力を借りて育っていくことを、今後の方向性としたい。②学習の成果を地域に向けて発表する機会は、校内外で定着している。地域を知る学習の充実を図っていきたい。③学校運営の成果と課題を丁寧に分析し、わかりやすく表すことに努めた。意見交流のポイントを明確にし、次年度につながる学校評価を目指していく。	B
医療的ケア	①看護師、養護教諭、クラス担任、及び医療をはじめとした関係機関の協働により、児童生徒の体調管理及び安全な医療的ケアの実施に努める。②収集したヒヤリ・ハットの内容を年間2回考察し、重大な事故を事前に防止するとともに類似の事例の再発防止に努める。③児童生徒の思いに寄り添うと共に、体調の変化に合わせて、保護者と随時相談し、丁寧かつ迅速な対応、環境整備を目指す。	①ミキサー食を用いた注入と経口摂取の併用を始めとした様々なニーズを受け、各所と情報を共有しながら検討し、安全な医療的ケアの実施に努めた。②新しい報告書式への移行に伴い、考察の方法の見直しを行うと共に、機器・マニュアル・実施方法等を再確認し、アクシデント・インシデント・ヒヤリハットの再発防止に努めた。今後も、新たな分析をもとに、再発防止に努めていく。③学校携帯電話の整備に伴って、迅速な校内連絡体制が整い、個々の児童生徒の体調に応じた運用ができた。	B
キャリア教育	①自己選択・自己決定の過程を日々の活動の場面で意識できるようにし、現場実習等の経験を通して自身の卒業後の姿をイメージできるようにし、進路選択につなげる。②経験を通した自分自身の変容に気づける機会として、ふり返りを捉えて大切に行う。③学校生活の様子から生徒一人ひとりの特性を見極め、進路決定に向けた取り組みを保護者とも丁寧に連携して行う。	①②生徒のコミュニケーション力の向上を目ざし、学校生活全般において、自分から発信できるよう指導支援を行っている。また、校内実習、現場実習のふり返りやキャリアデザイン相談会を通して、目標設定（個別の支援計画の作成）する過程は、卒後の生活にも生かさると思う。さらによりよい支援指導に向け改善していきたい。 ③1年コース選択、2年職種選択、3年進路決定など、段階を踏んだ丁寧な支援（相談し重ね自分で決定する）を心掛けている。保護者とも、説明会や面談を通して連携して取り組むことができた。	B
いじめへの対応	①児童生徒が「参加・活躍できる授業」「わかる授業」を工夫し、実践する。 ②保護者懇談会・家庭訪問・個人面談・連絡帳等を通じて、保護者と連携する。 ③スクールカウンセラーの活用、いじめアンケート、定期的な面談等を行うことで、生徒の心理的、精神的な状況の把握を行う。（B部門のみ）	①児童生徒の実態を把握し、個別の指導計画に基づいた授業実践を行った。②児童生徒理解がより深まるよう計画的かつ日常的に保護者と学校とが双方の情報共有を行った。対応が必要な事柄があった場合には、保護者と学校が協力し合い、迅速に問題解決にあたるよう努めた。③スクールカウンセラーによる専門的な助言をいただき、生徒たちの心的状況の把握に努めた。いじめアンケートの結果を学校で共有し、その状況改善にも努めていきたい。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①校内研修を4回実施し、専門性・危機管理能力など、学校に求められる教職員の力量の向上を目指す。 ②A部門、B部門及び全校の組織の効果的運営を目指し、運営委員会(週1回)での情報交換、意見交換を充実させる。 ③メンターチームの取組を推進し、教職員のキャリアステージに応じた校内人材育成を充実させる。 ④働きやすい職員室を目指し、環境整備とレイアウト等の工夫を行う。	①理学療法研修、救急蘇生法研修、防犯研修、人権研修などを行い、専門性・危機管理能力など教職員の力量向上が目指せた。次年度も引き続き実施していく。②AB部門の行事、会議設定などのすり合わせを行い学校運営を円滑にすることができた。③メンターチームをクラスでの取組みと位置付け学級会や授業研究会などの話し合いを通じて人材育成の観点を意識して取り組んだ。④年度当初、働きやすい職員室を目指しロッカーの割り振りや掲示の見直しを図った。	B
学校関係者評価	学校と地域が密接に関わり、そこに保護者も加わり地域に育てて頂いてることを理解した。わかば学園のことをもっと地域に知らせるとよいのではないか。小中学校の学校通信は、地域の回覧板にのせている。教科で身につけた知識を、どのように実生活に結びつけ、評価していくかが課題ではないか。多くの地域行事に児童生徒、教職員が参加をしていることは大変によい。これからも続けて欲しい。軽度知的高等部と肢体不自由部門が併設されている強みを更に生かして欲しい。特別支援学校、特に、わかば学園は直接「命」に関わる学習の場でもある。児童生徒の体調管理の中で緊急対応が必要なこともあり、それに対する教職員のストレスも計り知れないものがあると思う。使命感も大切だが、子どもたちと一緒に楽しんで教育に携わって欲しい。		
評価結果に対する学校の見解	平成28年～30年度の学校評価において、肢体不自由教育部門と知的障害教育部門の交流をさらに深化させていくとしていたが、今年度においては、様々な取組で、児童生徒の交流活動を行うことができた。その点については、保護者、教職員とも高評価をしている。若葉台という恵まれた地域性を生かし、知的障害教育部門の教育活動のみならず、肢体不自由教育部門の児童生徒も、地域に活動の範囲をより広げていき、地域に理解者を増やしていきたい。学校教育に関しては、両部門の保護者から高い評価を得ている。質の高い教職員集団を誇りに、今後とも真摯に「誰もが来たがる学校」づくりに取り組みたい。		
中期取組目標振り返り	重点取組分野の各項目については一定の成果が得られたが、どの項目でも課題はまだある。今年度の課題を整理し、各項目の具体的取組を常に視野に入れながら、中期取組目標が達成されるように取組んでいきたい。		

令和 2 年度

重点取組分野	具体的取組	自己評価結果	総括
生きてはたらく知	A：①個別の教育支援計画及び個別の指導計画の内容や作成の手順等の見直しを行い、作業の明確化や効率化図る。また指導と評価の一体化を推進し、個々の目標達成を目指して、評価に基づいた授業改善を図る。②一人ひとりを大切にした教育課程の編成（授業内容の精選・組織と授業時数の配当等） B:①地域に展開する校内実習を行うことで、自己有用感やコミュニケーション力を身に付ける。②現場実習を行い、自己選択・自己決定する力を身に付ける。③この2つを結びつけ、ふり返る力を育て、キャリアデザイン相談会を行う。④将来の自立に役立つ一般教科指導の充実を図る。⑤教育課程を見直すことで、よりよい授業実践を図り、自立と社会参加を目指し生きる力を身につけられるようにする。	A:① 個々の目標達成に向けた取り組みについては、保護者からも高い評価を得られた。指導目標を設定する際に、児童生徒の実態把握に基づいた指導と評価が概ね達成できたと考える。今年度はコロナ禍で、学校の様子がわかりにくい点もあり、無記入の集計が増えた。今後も丁寧に説明していく。 ② 小中学部新教育課程について、ふりかえりを行い、改善点を検討していく。 B:①コロナ禍の影響もあり、後期より地域に展開したが、先方からコロナ禍の影響で断られるところもあった。しかし、コロナ禍に対応した新たな取り組みも少しずつだができた。 ②コロナ禍の影響で、2年生の現場実習が一部中止になったが、目的は果たすことが出来た。 ③キャリアデザイン相談会を通じてふり返る力、相談する力が身に付いた。 ④⑤研修を通し新学習指導要領に沿った取り組みへの検討ができた。	B
育ちあう力	『豊かな心の育成プラン』に基づき、「交流及び共同学習」の充実を図る。 ○A・B両部門間の「校内でのふれあい交流活動」を通して、仲間意識を育み、共に生きる力を育てる。また、「学校間交流」「地域との交流」「副学籍による交流」などを通して、他者を大切にし“育ちあう力”を育む取組を推進する。	「校内でのふれあい交流活動」は、感染症拡大防止の観点から中止した行事が多く、日常的な昼休み交流も行わなかった。今年度は、集合しない形として新しく「ビデオ交流」を行った。来年度は、内容や実施方法を検討する必要がある。	B
健やかな体	A：保護者や医師の協力のもと、個々の児童生徒の健康状態を適切に把握し、日々の健康の維持と増進を目指して取組を行う。 B：自他の体を大切にし、自らの健康を見つめ、進んで生活の改善を行うとともに、生涯の健康づくりのための取組を行う。	A・B：今年度は、新型コロナウイルスの感染対策という大きな課題と直面し続けた。「感染予防」という観点を最重要課題とし、状況に合わせて日々の清掃や消毒等の環境整備に取り組んだ。 検診や研修に関しては、いつも通りのやり方では実施できないものも多くあったが、できる方法を模索し、感染対策を行いながら実施することができた。 児童生徒の健康状態の把握に関しては、家庭との連携を例年以上に密にし、体調管理に努めた。 B：日々の清掃や委員会活動の中で、健康、安全、衛生面など、適切な学習環境整備に取り組んだ。また、家庭科や体育などの教科学習の中で、生涯の健康を保持増進するための授業を行い、生涯の学びに繋げた。	B
センター的機能の取組	①旭区の小学校・中学校などへの教育相談や巡回支援、研修の提供など特別支援教育の専門性を活かした取組の促進と充実を図る。②若葉台地区周辺の教育機関や福祉機関、地域の方々と連携・協働し、障害理解や啓発、研修の提供などを通して当事者の方々の社会参加に貢献する。	① 1月中旬現在、旭区の小学校への教育相談巡回支援は43ケース、研修提供は2件おこなった。 ② 福祉機関への研修提供および学校見学を通じた理解啓発活動を10件程度おこなった。 ①②ともにコロナの影響を受け、地域からの要望に対応できないケースもあった。また、センター的機能の取り組みについての周知がまだまだ不十分であるので、引き続き取り組んでいきたい。	B
地域連携・学校運営協議会	①これまで培われてきた、B部門と地域とのつながりを活かし、A部門も共に学び地域と交流する機会を模索する。②様々な媒体や機会を活用し、学校教育活動と地域住民活動の相互理解を進める。③学校運営協議会での意見交流をより効果的に生かせるよう、地域連携に関してわかりやすく要点を絞った学校評価を行う。	①感染症の拡大により、地域とのつながりに苦慮した年度であった。B部門は、地域での実習に引き続き取り組んでいる一方、地域活動への参加はできなかった。A部門は、地域の読み聞かせボランティアによる学習など、例年通りの活動を行えた一方、地域の学校との交流はできなかった。感染症対策をしながらの取組をより工夫する必要がある。②学校だよりを地域に配布する取組を始めた。③学校評価について、保護者アンケートおよび職員自己評価の結果を前年度結果と数値（グラフ）で比較し、より客観的な分析をするよう試みた。	B
医療的ケア	①看護師、養護教諭、クラス担任、及び医療をはじめとした関係機関の協働により、児童生徒の体調管理及び安全な医療的ケアの実施に努める。②収集したヒヤリ・ハットの内容を年間2回考察し、重大な事故を事前に防止するとともに類似の事例の再発防止に努める。③児童生徒の思いに寄り添うと共に、体調の変化に合わせて、保護者と随時相談し、丁寧かつ迅速な対応、環境整備を目指す。	① 新型コロナをはじめとした時事問題の解決、研修などを通して、児童生徒の安全な学校生活に資した。 ② ヒヤリハット防止のため注入マニュアルの書式の改訂を行った。 ③ 拡大人工呼吸器部会を立ち上げ、課題の解決に向けて検討を重ねた。	B
キャリア教育	①自己選択・自己決定の過程を日々の活動の場面で意識できるようにし、現場実習等の経験を通して自身の卒業後の姿をイメージできるようにし、進路選択につなげる。②経験を通した自分自身の変容に気づける機会として、ふり返りを捉えて大切に行う。③学校生活の様子から生徒一人ひとりの特性を見極め、進路決定に向けた取り組みを保護者とも丁寧に連携して行う。	① 各学年共にコロナの影響により受け入れ先が制限され、例年通りの現場実習実施には至らなかった。そのような中でも受け入れてくださった企業等での貴重な経験を通して進路選択につなげた。 ② 例年以上に感謝の気持ちをもって臨んだ現場実習に対して一人ひとりが丁寧にふり返りを行った。 ③ 進路決定に当たっては本人の意思を第一とすることが前提だが、保護者も交えた面談を実施し、丁寧な連携を心掛けた。	B
いじめへの対応	①児童生徒が「参加・活躍できる授業」「わかる授業」を工夫し、実践する。 ②保護者懇談会・家庭訪問・個人面談・連絡帳等を通じて、保護者と連携する。 ③スクールカウンセラーの活用、いじめアンケート、定期的な面談等を行うことで、生徒の心理的、精神的な状況の把握を行う。（B部門のみ）	①児童生徒の実態を把握し、個別の指導計画に基づいた授業実践を行った。 ②様々な機会・媒体を通じて計画的かつ日常的に保護者と学校で情報共有を行った。対応すべき課題については保護者と学校が連携して問題解決に努めた。 ③今年度は、SCの回数が2回増え、より多くの生徒が専門的助言をいただくことができ、生徒支援にいかすことができた。いじめアンケートの結果を学校で共有し、必要な生徒には教育相談を行い、状況の把握、改善に努めた。また、コロナ禍の生徒支援についての研修ビデオも作成し、教員研修を行うことができた。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①校内研修を4回実施し、専門性・危機管理能力など、学校に求められる教職員の力量の向上を目指す。 ②校内組織の効果的運営と学校運営上の課題解決の取組の推進を目指し、運営委員会及び課題に関連する部署の代表者による特別委員会を開き、情報交換、意見交換を充実させる。 ③メンターチームの取組を推進し、教職員のキャリアステージに応じた校内人材育成を充実させる。 ④会議の効率化を図るため、内容の精選と設定の工夫をする。	A:① 感染症対策のため各研修をリモートで行った。理学療法研修、救急蘇生法研修、防犯研修、摂食研修、人権研修など、専門性・危機管理能力など教職員の力量向上を目指し実施した。リモート環境が完璧ではないため微細なところまで画面で確認できないった。次年度に環境を整えて引き続き実施していく。 ②AB部門の行事、会議設定などのすり合わせを行い、学校運営を円滑にすることができた。感染症対策の徹底を目指しコロナ対策会議を設定し児童生徒が安心して学校生活が送れるよう運営した。 ③メンターチームをクラスでの取り組みと位置付け学級会や授業研究会などの話し合いを通じて人材育成の観点を意識して取り組んだ。 ④朝の打ち合わせを週2回にしたり、密を避けるため職員会議をリモートにしたり設定の工夫をした。 B:①方法や内容変更し実施することができた。今後情報機器の利用等も含め教職員の力量向上のための研修を重ねる。 ②感染症拡大防止に対応した学校運営について、特別委員会を設置し意見交換をすることができた。 ③年次研修の教職員を中心にメンターチームを作り教職員のキャリアステージに応じた人材育成を行った。また、授業研究会や授業見学デーを行い、教職員で授業を見合うことで授業改善につなげた。 ④会議内容の精選や日時の設定の工夫などを行い、今後とも効率よく会議を運営できるように工夫する。	B
学校関係者評価	全般的に教職員の自己評価が低い傾向にあるが、コロナだけの影響なのか、何か別の要素があるのだろうか、教育活動を十分に行うことができなかった口惜しさや残念さが伝わってくる評価と感じている。A部門保護者評価で、個別の教育支援計画、医療的ケア、児童生徒の成長の項目で評価が上がっているのは素晴らしい。B部門保護者評価からは、AB部門間の交流や地域との交流ができなかった事について今後の工夫が必要と、読み取れる。また、生徒の相談力の向上や現場実習の高評価は学校がこれまでに取り組んできたことへの評価である。AB併置校だからこその教育効果、理解の促進は大切な事である。これからも確実にその事の発信が望まれる。センター的機能については、卒後の3年以降についても、更にはこの若葉台地域で暮らす障害者への相談機能も将来的には担っていくことが理想である。		
評価結果に対する学校の見解	コロナの影響により多くの行事が中止又は延期となった。しかし、学校の在り方を見直す良い機会とも考えられる。また、僅かに実施できた行事で活動する子供達の様子から、行事は学校生活に目標をもってメリハリのある日々を過ごすために必要であると改めて感じた。行事を通し子供は生きる力を育み、教職員は子供を多面的に見つめることができる。これまでの価値観のままに教育活動をしていないか、いま一度学校教育目標と照らし合わせ目的は何か、どんな力を付けたいか、新しい発想で行事の実施を模索したい。B部門の定員割れはその全体像を他2校とも分析、共有し若葉台が選ばれる学校を目指したい。HPが新しくなるのでセンター的機能も含め、教育実践を発信し、社会に開かれた教育課程を目指したい。		
中期取組目標振り返り	今年度は、重点取組分野の各項目について、学校教育目標の実現に向けて取り組み、コロナ禍であるが一定の成果は見られたが、まだまだ十分ではない。来年度も、コロナ禍での教育実践が予想される中、教育目標の実現に向けてさらに、意図的、計画的、組織的に教育活動に取り組むとともに、新教育課程を意識した学校づくりに取り組んでいきたい。		

令和 3 年度

重点取組分野	具体的取組	自己評価結果	総括
生きてはたらく知	A①指導と評価の一体化を推進し、個々の目標達成を目指して、評価に基づいた授業改善を図る。②一人ひとりを大切にした教育課程の編成（高等部の新学習指導要領編成にむけての取り組み・授業内容の精選・組織と授業時数の配当等） B:①地域に展開する校内実習を行うことで、自己有用感やコミュニケーション力を身に付ける。②現場実習を行い、自己選択・自己決定する力を身に付ける。③この2つを結びつけ、ふり返る力を育て、キャリアデザイン相談会を行う。④将来の自立に役立つ一般教科指導の充実を図る。⑤教育課程を見直すことで、よりよい授業実践を図り、自立と社会参加を目指し生きる力を身につけられるようにする。⑥研究を通して、生徒がわかる教育課程を目指し、次期中期学校計画に向けて生徒と3年間で目指す資質・能力を共有する。	A:① 教育支援計画や個別の指導計画について保護者の想いを大切にしながら指導計画をたて実践した。個々の目標達成に向けた取り組みについて、児童生徒の実態把握に基づいた指導と評価は保護者のアンケートからも高い評価を得られ、概ね達成できたと考える。児童生徒に身につけたいカを明確にして、一人ひとりに確実に身につくように日々の指導を工夫していく。今年度はコロナ禍で、学校の様子がわかりにくい点があったが、今後も丁寧に説明していく。 ② 小中学部新教育課程について、ふりかえりを行い、改善点を検討していく。また、道徳科や総合などの在り方を検討した。高等部の新教育課程の整備をし、4年度から実践していく。 B：①コロナ禍ではあったが、感染状況を鑑みながら地域に校内実習を展開することができた。②コロナ禍によって現場実習が急遽中止になったり日程の変更等があったが、キャリアデザイン相談会と組み合わせる事で自己選択・自己決定する力を身につけることがある程度できた。③コロナ禍によってオンラインに変更になったり内容の調整が必要になったりすることがあったが、キャリアデザイン用段階を実施し振り返る力を付けることができた。④⑤⑥将来に役立つ一般教科指導を目指し生徒本人に何を学びたいかを聞くことで次期シラバスに生かすことができた。また、ICTが進みより生徒にとって学びやすい環境が整った。教育課程の見直しを行うために学校として目指すものを教員間で明確することができた。また、そのも反省を生徒に明示する事で生徒と共に作る教育課程の実践への一歩が踏み出すことができた。	B
育ちあう力	感染症対策に配慮しながら、『豊かな心の育成プラン』に基づき、様々な交流活動の充実を図る。 校内交流、地域との交流、学校間交流、副学籍交流など、これまで継続してきた活動の新しい取り組み方を模索し、実践していく。関わり合いの中で、自分を表現し、他者を意識・大切にする”育ちあう力”を育む。	「校内でのふれあい交流活動」は、感染症に配慮しながら、「新しい形」での交流を行った。ふれあい交流では、直接の交流はできなかったものの、時間を分けて共同制作を行うことができた。対面式やわかばフライデーでは、直接的な交流をすることができた。他の活動は、昨年と引き続き「ビデオ交流」を中心に行った。 来年度は、感染症に配慮しつつ、直接的な交流ができる内容や実施方法を検討していく。	B
健やかな体	A：感染症対策を行いながら、保護者や医師の協力のもと、個々の児童生徒の健康状態を適切に把握し、日々の健康の維持と増進を目指して取組を行う。 B：感染症予防の正しい知識を持ち、自他の体を大切にし、自らの健康を見つめ、進んで生活の改善を行うとともに、生涯の健康づくりのための取組を行う。	A：感染症予防の観点から日々の清掃方法や食事マニュアルについて検討を重ね、現状に合わせて変更も行った。今年度も感染対策をしながら、臨床指導医による摂食研修や、アレルギー研修などの場を設定することができた。児童生徒の健康状態の把握については、養護教諭や看護師との連携を密にし、情報共有を行うことで、日々の健康維持と増進に努めた。 B：日々の清掃や委員会活動を通して、健康、安全、衛生面など、適切な学習環境整備に取り組んだ。また、家庭科や体育などの教科学習を通して、身体や食について学び、生徒が自ら意識して健康を保持増進できるように取り組んだ。	B
センター的機能の取組	①旭区の小学校・中学校などへの教育相談や巡回支援、研修の提供など特別支援教育の専門性を活かした取組の促進と充実を図る。②若葉台地区周辺の教育機関や福祉機関、地域の方々と連携・協働し、障害理解や啓発、研修の提供などを通して当事者の方々の社会参加に貢献する。	①1月中旬現在、旭区・緑区の保育園や小中学校への教育相談は5ケース、巡回支援は63ケース、研修提供は3件おこなった。②旭区・緑区・瀬谷区・青葉区・都筑区・保土ヶ谷区などの自立支援協議会（児童支援、相談支援、移動支援、重心部会など）に参加し、若葉台地区周辺の教育機関や福祉機関、地域の方々と連携・協働し、障害理解や啓発、研修の提供などを通して、児童生徒の社会参加に貢献した。	A
地域連携・学校運営協議会	①AB両部門共に、感染症拡大を防ぐ配慮をしながら、地域とのつながりを充実したり、新たな取組を模索したりする。②様々な媒体や機会を活用し、学校教育活動と地域住民活動の相互理解を進める。③学校運営協議会での意見交流をより効果的に生かせるよう、地域連携に関してわかりやすく要点を絞った学校評価を行う。	①昨年度に引き続き感染症拡大に苦慮しながら、地域とのつながりを模索した年度であった。B部門は、従来からの地域での実習に引き続き取り組んできた。A部門は、地域の学校との交流はできなかったが、中学部遠足では若葉台ショッピングセンターにて散策活動を行い、地域との交流を図るなど、従来から行ってきた地域学習の取り組み加えて、行事として新たな取り組みをすることができた。 ②昨年度に引き続き、学校だよりを地域に配布する取り組みを行っている。 ③昨年度のグラフに加えて、地域連携部分でA部門の取り組みを紹介し、より具体的に意見交流ができるように試みた。	B
医療的ケア	①看護師、養護教諭、クラス担任、及び医療をはじめとした関係機関の協働により、児童生徒の体調管理及び安全な医療的ケアの実施に努める。②収集したヒヤリ・ハットの内容を年間2回考察し、重大な事故を事前に防止するとともに類似の事例の再発防止に努める。③児童生徒の思いに寄り添うと共に、体調の変化に合わせて、保護者と随時相談し、丁寧かつ迅速な対応、環境整備を目指す。	①医療的ケアワーキング内や日々の学習の中で看護師・養護教諭・クラス担任で児童生徒の体調の情報を共有することに努めた。課題が生じた場合は臨床指導医の意見を仰ぎ、児童生徒の体調管理などの参考にした。また今年度は看護師が胃音や胃残の確認を行うなど新しい取り組みが始まったことにより、さらに連携を取りながら実施した。②ヒヤリハット報告を年間2回まとめて考察し共有した。半期ごつの報告では再発防止の観点から少ないという意見も上がっているので、来年度に向けて再考する。注入時のヒヤリハットが目立つので、重要ポイントなど研修を行っていく。 ③児童生徒の体調把握や思いを汲み取り、保護者や看護師・養護教諭・クラス担任で共有した。場合によっては管理職にも相談し丁寧な対応につなげる努力をした。拡大人工呼吸器部会では、生徒の自立や保護者の負担軽減・検討の土台作りができた。	B
キャリア教育	①自己選択・自己決定の過程を日々の活動の場面で意識できるようにし、現場実習等の経験を通して自身の卒業後の姿をイメージできるようにし、進路選択につなげる。②経験を通した自分自身の変容に気づける機会として、ふり返りを捉えて大切に行う。③学校生活の様子から生徒一人ひとりの特性を見極め、進路決定に向けた取り組みを保護者とも丁寧に連携して行う。	①現場実習の実施においては、今年度もコロナの影響を受け、実施直前での中止や延期があるなど、引き続き臨機応変な対応が求められた。現場実習の経験は、一人ひとりが進路を決定していく上で大きな影響力をもつため、このような状況下でも実施できたことをありがたく感じる。②現場実習ごとに、実習担当者と共に丁寧なふり返りを行い、良かった点や課題点を整理し、学校生活に結び付けるように努めた。③進路決定に際しては、保護者を交えた面談を大切にした。対等な面談を通して、本人・保護者が納得できる進路を共に見つけていけるように心掛けた。	B
いじめへの対応	①児童生徒が「参加・活躍できる授業」「わかる授業」を工夫し、実践する。 ②保護者懇談会・家庭訪問・個人面談・連絡帳等を通じて、保護者と連携する。 ③スクールカウンセラーの活用、いじめアンケート、定期的な面談等を行うことで、生徒の心理的、精神的な状況の把握を行う。（B部門のみ）	①児童生徒の実態を把握し、個別の指導計画に基づいた授業実践を行った。 ②児童生徒理解がより深まるよう計画的かつ日常的に保護者と学校とが双方の情報共有を行った。対応が必要な事柄があった場合には、保護者と学校が協力し合い、迅速に問題解決にあたるよう努めた。 ③年13回のSCと長期休業明けの教育相談を活用しながら生徒の心理的ケアに努めた。また、いじめアンケートの結果を踏まえ、必要な生徒には個別支援を行い、状況の把握、改善に取り組んだ。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①校内研修を4回実施し、専門性・危機管理能力など、学校に求められる教職員の力量の向上を目指す。 ②校内組織の効果的運営と学校運営上の課題解決の取組の推進を目指し、運営委員会及び課題に関連する部署の代表者による特別委員会を開き、情報交換、意見交換を充実させる。 ③メンターチームの取組を推進し、教職員のキャリアステージに応じた校内人材育成を充実させる。 ④会議の効率化を図るため、内容の精選と設定の工夫をする。	A：① 感染症対策を講じてほとんどの研修をリモートで行った。理学療法研修、摂食研修など障害児教育の専門性の向上を図り実施した。iPadを利用したり経験の浅い教職員においては研修会場にて直接受けるなどした。次年度より学校行事や授業についてもコロナ禍以前のものが行われるためより学習に即した研修を実施し教職員の力量の向上を図る。 ②前年度からコロナ感染症対策のための会議を招集し学校内の対策を検討した。また学校組織の見直しを運営委員会とともに再検討した。 ③各クラスで授業研究を設定し学級会や研究会の話し合いを通して人材育成の観点を意識して取り組んだ。 ④職員会議の資料を事前に配信し会議の効率化を図った。また、全体で集まる職員会議についてはICT教育部の協力を得てリモート参加で実施した。 B：① 一人ひとりを大切にする学校教育目標達成に向けて年度当初から生徒理解研修を丁寧に行った。年間を通じて会議や打合せに生徒理解についての枠を設けて取り組むことができた。また、GIGAスクール構想に伴いロイロノートを活用した授業づくりなど、一人一台端末の整備に向けた取り組みができた。 ② 校内組織の見直し、具体的な組織運営について運営委員会を主体として改善を図ることができた。また、感染症防止対策について適宜コロナ対策会議を招集し校内体制の一本化に向けての共通理解を図ることができた。 ③ 年次研修の教職員とT・Tおよび学年職員が主導で行う授業研究会にはメンターチームの枠を超えて多くの教員が参加し協議を深めることができた。教員相互に授業を見あう授業見学デーでは、より多くの見学ができるよう見学教員の授業予定を調整した。 ④ 限られた時間の中で効率よく運営するため優先順位を設けて内容を精選してきたが、時間外になってしまうものも多く引き続き検討をしていく必要がある。	B
学校関係者評価	A部門については、「子ども達が参加・活躍できる授業、わかる授業」づくりに積極的に取組んでいる様子や、保護者とも随時相談しながら丁寧に教育活動を進めている様子が、教員の自己評価が高いことからもわかりとても素晴らしい。B部門については、コロナ禍でも実習等可能な中で積極的に地域との共に育てる教育を進めている。キャリア教育や授業力等に関する評価が前年より下がってきている。地域との共生が大きな特色だけに、一般教科の指導等も含め、新たな視点での教育手法の開発や取組の工夫等が必要になってきているのではないか。 創立メンバーからの入れ替わりが進み、本来の「若葉台の教育が目指す姿」等の共通理解を進めていく必要がある。コロナ禍で地域との共生の姿に関する情報の発信が全般に少なくなり低評価につながっている。ICT活用を進め、効果的な取組や情報発信などをしてほしい。わかば学園が若葉台地域の学校である、つながっている実感を感じられるような取組をさらに前進させていってほしい。		
評価結果に対する学校の見解	コロナ禍の制約下でも、AB部門の交流教育や地域と共に育てるキャリア教育において、新しい形や可能な形での実習を模索し推進してきた。またセンター的機能による地域支援を展開できた。「子ども達が参加・活躍する授業」「わかる授業」を実現するための積極的な取組や、保護者と丁寧に連携を取りながら迅速に対応し教育活動を進めている。B部門への志願者の増加は本校への期待が大きいことを指している。キャリア教育や知的高等部としての一般教科の指導について検証、課題分析を進め、社会に開かれた教育課程の一層の充実を図っていきたい。		
中期取組目標振り返り	今年度は、コロナ禍での感染対策を進めつつ、重点取組分野の各項目について、学校教育目標の実現に向けて取り組み、一定の成果は見られた。授業づくりへの取組や保護者との連携により、日々の教育活動の充実は図られてきている。教育目標の実現に向け、意図的、計画的、組織的に教育活動に取組み、本校の肢体不自由教育、知的障害教育に期待されるニーズに応えた社会に開かれた教育課程、学校づくりに取組んでいきたい。		